

宛所右同斷

何之誰  
何之誰

右御參勤御用御荷物認裁許與力、不依晝夜石川・河北兩御門往來行拔指支不申様、御番人<sup>レ</sup>被仰渡可被下候。以上。

月 日 名 無判

御城代御用番様

一、右御荷物認所は、蠟燭懸所に而<sup>(前々カ)</sup>毎々より認申候。且又右與力相極候へば、江戸會所へ茂申遣、判・印鑑も指遣候事。

二五 急御用之節之儀覺

一、御用番之節、在宅又は外に居申候砌、石動或高岡等<sup>レ</sup>急に何に而も御用之品申來、即刻申遣候節は、先會所<sup>レ</sup>小遣に申付菓子屋次郎右衛門を呼に遣置候而、右御用之品可申渡事。

但、菓子屋は遠所御用之飛脚等裁許仕候者也。

一、吳服・料紙・小拂等、其外何に而茂急渡り、役所仕廻或

は半日扨に申來候節、其切手奥書調様。

或は可被相渡候  
右御渡可有之候。明日場印合可申候。

名 印

右申來候節、夫々之役人中へ、追付御出御渡可有之旨紙面を調、右切手持參候者に相渡、可遣候事。

一、所々より到來候騎・素麴等に而茂、不依何到來候はゞ、下御臺所<sup>レ</sup>早速差遣、尤御用所<sup>レ</sup>案内仕候事。

但、御臺所附之類也。

一、出銀渡りには、奥書も入不申候。去共役銀わづかならで無之、小拂より請被申時は、御用番之者急渡り之砌は奥書に而無之候而は、小拂より渡り不申候。尤半日か又は御横目在合不申節之事に候。

一、御扶持方、其外何に而茂急渡りには、尤御用番之者致奥書候事。

一、江戸并京都より早飛脚到來候はゞ、早飛脚之ものは請取を遣、後刻又は明朝右飛脚發足罷歸候旨、夫々<sup>レ</sup>之添紙面に其趣可申遣事。

一、御領園之内、御獻上・御進物・御膳所御用之品々可申遣

覺

一、一人 小者

右越後高田加賀屋與七郎方より爲使指越候所、御用相濟相返候條、越中境御關所無異儀御通可被成候。以上。

戊申八月九日

高田勘左衛門印

金森助右衛門殿

右中折に相調遣候由。右飛脚之者會所<sup>レ</sup>不罷越以前に、飛脚宿中條屋八郎兵衛方に着候へば、前々より之格に而、八郎兵衛方より町奉行<sup>レ</sup>達、町奉行より過書出候へ共、最初に御用番宅迄着申に付、右町奉行中に而は貪着無之格之由、八郎兵衛申旨に而、會所御用番之者より右之通過書相調遣候事。

但、如此候間、是以後飛脚指越候者、宿被申付候様にと、町會所紙面遣申候。左候得ば過書町奉行中より出申候。

一、日光迄早飛脚足輕二人、割場より指遣候間、歸申刻確氷御關所過書調可遣旨、割場より印之紙面到來、調遣候事。

早飛脚足輕二人、加州より日光迄指遣候條、罷歸節、確氷御關所無異儀御通頼入處如件。

但、能州所口<sup>レ</sup>は仕立飛脚菓子屋次郎右衛門、小松は井筒屋庄兵衛申遣候事。

二六 石川・河北兩郡門切手之儀覺

一、二之御丸より何に而茂爲持、石川・河北兩御門外<sup>レ</sup>小遣迄爲持指遣候節、左之通切手調爲持可差遣事。

覺

一、何  
右爲持指遣候間、御門無滯御通可有之候。以上。

何何月何日 誰 印

河北・石川御門御番與力衆中

二七 御關所過書之儀覺